MEGARO MIX

REMIXREMIXREM

ROCK'S DRUG 12

ＲＡＶＥの快楽って何だ？

「ＲＡＶＥパーティー」ってご存じですか？　簡単に説明すると、それは大規模なハウス・パーティーのことで、大きいものになると数千〜１万人以上もの大勢の人を集めて体育館クラスのホールや野外で行われてる。イギリスでは１９８９年頃から非合法に行われ大流行したが、ドラッグの問題から次第に当局の許可が必要になり、最近では合法的な比較的イヴェント色の強いパーティーに移行しつつあるようだ。

ＲＡＶＥパーティーは、スペインのイビザ島、インドのゴア、アメリカ西海岸…といった気候の良いリゾート地で行われる場合も多く、こうしたことを考えあわせると、ＲＡＶＥを９０年代流のヒッピー・カルチャーとして捉えることも可能かも知れない。あるいは、ＲＡＶＥ＝現実逃避型の退廃的レクリエーションとする厳しい指摘もあるだろう。しかし、遊びにはそもそも多かれ少なかれ現実逃避的な要素が含まれており、今や世界的規模で流行するＲＡＶＥというレクリエーションを一概に否定するわけにはいくまい。

しかし、実のところ個人的には未だ海外でのこうした大規模なＲＡＶＥパーティーに参加したことがなく（推測でものを書いて申し訳ない）、つい先日までＲＡＶＥの快楽について疑問を感じていたのも事実だ。集団でバカ踊りすることの快楽に何だかウサンくささを感じていたし、しかもＲＡＶＥのフライヤー（チラシ）の多くがニューエイジ信仰宗教的なデザインになっているということや、ＲＡＶＥに於ける音楽が刺激性の強いテクノ・ハウス（俗に言うハードコア・テクノ）ばかりであることなどから、どうしても生理的な拒絶感を抱いていた。

それでも、何事もまず体験することが重要。百聞は一見にしかず…と言うわけで、先日、東京・竹芝桟橋近くで行われた「ＲＡＶＥ　ＥＡＳＴ」なるパーティーに足を運んだ。このイヴェントはＲＡＶＥとは言っても基本的にはライヴ・コンサート＋クラブ・パーティーの延長線上にあり、当然の如く海外のＲＡＶＥパーティーとは明らかにスタイルの異なるものだったが、そのシミュレーションとしてはなかなか楽しめた。その光と音の洪水は、ビールでほろ酔いの頭と体には至極心地良く、レーザー光線やビデオ・プロジェクターによる大掛かりなライティング・システムとロンドンからやってきた黒人ＤＪ・ファビオによるブレイクビーツ・ハウス（ラガ・テクノ）を主体とする横ノリのグルーヴに煽られて、思わずバカ踊りをしてしまったのだった。

日本では純粋なＲＡＶＥスタイルのパーティーなど実現不可能かも知れないが、レゲエ・サンスプラッシュ的お祭りイヴェントだったら可能かもよ？

ＲＥＭＩＸ　小泉雅史

TRAFFIC OF DANCE GROOVE12

バック・トゥ・ベイシックするダンス・ミュージック

　最近聴いたダンス・ミュージックで最も印象に残っているアルバムを3つ挙げてみると、ガリアーノの2ND「ジョイフル・ノイズ・アントゥ・ザ・クリエイター」（日本フォノグラム／洋盤シングル・カットは「スカンク・ファンク」）、アレステッド・デベロップメントの「3イヤーズ、5マンス・アンド2・デイズ・イン・ザ・ライフ・オブ」（東芝EMI／洋盤シングル・カットは「テネシー」）、ケリ・チャンドラーのアルバム「ア・ベイスメント、ア・レッド・ライト、アンド・ア・フィーリン」（独盤）となる。この3枚はジャンルは異なるが、いずれもバック・トゥ・ベイシックしているという共通点がある。

　シーンが保守化しているとか、バック・トゥ・ベイシックしているもの、新奇な傾向のものをチョイスしているのではなく、最も面白いものを見ると、バック・トゥ・ベイシックしていたと考えて欲しい。

　ガリアーノはロンドンのニュー・ジャズ（ヒップ・ホップ・ジャズ）・ムーヴメントを引っ張るグループだ。1ST、2NDともにストリート・オリエンテッドでハイブリッドなサウンドだ。しかし、1STがジャズ色が強く「危うさ」を感じさせた比べて、今回の2NDはファンク&R&B色が強く「力強さ」を感じさせるようになっている。

　アレスッテッド・デベロップメントはアトランタの新人ヒップ・ホップ・チーム。ニュー・スクールっぽさも持っているが、その「次」を感じさせる注目のチームだ。メンバーに衣装担当やダンスの振付け担当がいて、ジャケットも面白く、トータルにコンセプチュアルなもの感じるチームだ。ヒップ・ホップはもともとファンクを母体にしているが、ニュー・スクールがジャズに傾倒したのに対して、アレステッド・デベロップメントは、アーシーで、R&B、アフロ色が強い。

　ケリ・チャンドラーはニュー・ジャージーのアンダーグラウンドなガラージ・ハウスを代表するアーティスト／プロデューサーで、現在最も注目すべき、ハウス系のクリエイターだ。ハウスはソウルを母体にしているが、ケリ・チャンドラーの新作はジャズ及びゴスペル色が強い。彼に限らず、ハウスはジャズ、ゴスペル、そして70年代ソウルへとバック・トゥ・ベイシックしているようだ。

　つまり、「ニュー・ジャズ」がファンク、R&B化し、「ニュー・ファンク」がR&B、アフロ化し、「ニュー・ソウル」がジャズ、ゴスペル化している。

　さて、ここからこの交通の法則性を分析・抽出するのが普通なのかもしれないが、僕はさらに多くの具体例を挙げながら、交通関係を法則化することなく、その錯綜を描くことの方を好む。例えば……

REMIX　若野ラヴィン

REMIXREMIXREMI

NON STOP CULTURE12

遊佐辰也個展を見て

　機械と人間のことを考えるとき、マン・マシーンなんて言葉が一時期流行ってたけど、そのあとサイバーパンクとかなって、結局今はヴァーチャル・リアリティなわけで、そういったとき僕がいつも感じるのは、なんだか人間の機械に対するコンプレックスなんですよ。

　たとえばこういったことが言えると思うんだけれど、オートマティック車とマニュアル車のどっちがサイバーか？　と聞かれたら僕のセンスだとマニュアルだって答えることになる。なんかこういったことって割と共感してくれる人もいるけど分かってもらえなかったりもするんだよな。で、いきなりジミ・ヘンのことを思いだしたけど、結局ジミ・ヘンってすごくテクノロジックなわけですよ。感じとして。どういうことか、つまりあるテクノロジーをイデオロギッシュに大上段に掲げて標傍する人って、結局そのテクノロジーを動物的な条件反射でクリアーするやつにはかなわないってことなんだな。

　音楽で考えてみればそういった革新は大抵、黒人がやってる。エレクトロニック・ギターにおけるジミ・ヘンや、街頭のモービル・DJ連中とかね。最終的なアウトプットの段階でグットフィールなら過程にこだわっちゃいない。まさに終りよければすべてよし！って感じ。そういった人間のアプローチこそいいと思うんだけれど。やっぱり新車を買って内張りのビニールをいつまでも貼ったままにしてるのってそうとうやばいんだよ。

　最近、遊佐辰也の個展を見にいってきたけどそうとう良かったな。水戸芸術館の「脱走する写真」展とかにも選出されたアーティストだけど、彼の新作がすごかった。等身大の彼自身の映像とエジンバラ天文台の天体写真がコンピュータ合成されていて、作品は一点につき5インチ光ディスク一枚の容量をくっちゃってて、その光ディスクも作品化されてて、映像作品は鏡面仕上げのものすごいクォリティの額に入ってて、光ディスクはアクリルケースに入ってる。すごく気持ちいい。そこには新車の内張りビニール貼りっぱなしとは対極の美学を感じた。きっとコンピュータのキーを一つ押すと、アクセラレータ、フルに積んでるコンピュータが一晩くらい考えちゃったりするんだろうな。それで2回に一回くらいバグったりするんだよきっと。ジミ・ヘンのフィードバックの気持ち良さにも通じるものがある。ああ面白かった。

AUTOBAHN　中島　浩

遊佐辰也パンフ
資料提供レントゲン藝術研究所
TEL03—3766—8655